

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	広島大学附属三原中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	音楽と平和～被爆樹木でできたヴァイオリンを通して～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

広島大学は、「平和を希求する精神、新たな知の創造、豊かな人間性を培う教育、地域社会・国際社会との共存、絶えざる自己変革という理念5原則の下、自由で平和な社会を実現し、人類の幸福に貢献することを使命とする」と大学の憲章に掲げている。これは、広島大学の附属学校である本校にも関連していることであり、本校7年生（中学校1年生）は、小学校の頃に平和を希求する学習を光輝（かがやき）¹⁾の中で実施してきた。さらに、今年度の5月にはG7広島サミットが広島県で開催されたこともあり、平和について考え、音楽と平和との関連について学習することは、非常に意義深いものであると考える。しかし、音楽と平和との関連の理解という概念的な理解で終始してしまえば、今後社会を生き抜く子どもたちの心に響く学習としては不十分であると考えた。そのため、まずは生徒がヴァイオリンの演奏を体験し、その構造や発音原理を理解することでヴァイオリンに親しみを持ち、その後広島大学が所有する被爆樹木でできたヴァイオリン²⁾を活用することとした。その際に、ヴァイオリンの制作者である三原博志氏が本校のある三原市に在住されており、ヴァイオリン製作について話を聞くことができること、そして広島大学平和センターの嘉陽礼文研究員から被爆樹木を使った楽器製作の背景について話を聞くことができること、広島大学大学院人間社会科学研究科高旗健次教授のもとで弦楽器を専攻している学生が被爆樹木を使って製作された楽器で弦楽四重奏の形態により演奏を行い、それを鑑賞することができること、また同研究科徳永崇准教授のもとで作曲を専攻している学生が弦楽四重奏のための編曲を行うことができることなど、本校のもつ人的資源を効果的に活用できるのではないかと考え、計画・実施に至った。

2. 活動・研究の目的（ねらい）

上記で述べた経緯を踏まえ、本研究ではフェーズ1～3（表1）のように授業実践した。また、対象は中学1年生（75名）で実施期間は2023年10月から2024年2月である。平和について考える前にヴァイオリンに触れることとした意図は、ヴァイオリンという楽器の構造を理解し実際に演奏し、楽器を身近に感じることで、被爆樹木を使って製作されたヴァイオリンについて学習することの意欲を高めるため、また、芸術鑑賞会で実際に楽器を見る際に、多様な視点で鑑賞するためである。フェーズ1では筆者がヴァイオリンを指導し、フェーズ2・3では外部講師を招聘して授業を実施した。外部講師を招聘することで専門的な知識や技能の提供を受けるなどして、より深い学習になると考えた。

表1 授業実践のフェーズ

フェーズ	活動
1	ヴァイオリンに触れ、その構造を理解したり基本的な演奏技能を習得したりする。
2	平和について考え、被爆樹木を使って製作されたヴァイオリンの経緯について知る。
3	芸術鑑賞会の中で被爆樹木を使って製作された弦楽器の演奏を聴く。

1) 本学校園（広島大学附属三原幼稚園・広島大学附属三原小学校・本校）が平成30年度から令和4年度まで文部科学省の研究開発指定を受けて研究開発した新領域のこと。総合的な学習の時間、特別活動、特別の教科 道徳、各教科4分の1を上限に抛出した時間の4つの時間を統合して光輝（かがやき）で育成したい3つの次元、7つの資質・能力を育成するためのプログラムを実施している。

2) 2019年に被爆樹木のシダレヤナギや被爆者埋葬地のエゴノキなどの部材を使って作られたヴァイオリンのこと。その後2020年にヴィオラ、2021年にチェロ、2022年にヴァイオリンが製作され弦楽四重奏での演奏が可能となった。

3, 活動内容

以下に、フェーズごとに活動内容を示す。

【フェーズ1】

フェーズ1では、全3回の音楽科の授業を行った。また、学習指導要領の(2)ア、イ(イ)、ウ(ア)を受けて授業を構成した。授業の中では楽器の取り扱い方、各部の名称を確認し、構え方やボウイング(弓の使い方)、フィンガリング(指遣い)などを指導した。生徒は『かえるの合唱』を演奏するという目標に向かって、ペアやグループの学習形態で協働的に学習活動に取り組むようにした。ヴァイオリンは2人で1挺とし、ペアで相互に技能の習得状況を確認できるようにした。歌唱分野の学習や器楽分野におけるリコーダーの学習などと違い、発音原理が視覚的に捉えられることから、相互にアドバイスする際にも具体的にアドバイスできるなど、ヴァイオリンを使うことで音楽科の学習が深まる場面が多く見られた(図1)。



図1 演奏についてアドバイスしている様子

【フェーズ2】

フェーズ2では、光輝(かがやき)の授業を行った。授業の中では、広島大学平和センター嘉陽礼文研究員の講話を行ったり、三原博志氏のインタビュー動画を上映したりした。嘉陽研究員の講話では、被爆樹木を使ってヴァイオリンを製作した経緯について、「ただ保管・展示するだけではなく、楽器として使用することで多くの人にその存在を知ってもらいたい」という思いや「音楽を通して平和の大切さを伝えたい」という思いを伝えた(図2)。また、シダレヤナギが爆心地から最も近い部材であることなど、それぞれの部材の特徴について嘉陽研究員より説明を行った。さらに、制作の際にでた端材に実際に触れるなど、体験的な学習を行った(図3)。加えて、原子爆弾が投下された翌日に建物の屋上でヴァイオリンを演奏していた南方特別留学生のエピソードが嘉陽研究員から紹介され、音楽がどのような力を持っているかということについても考える機会とした。インタビュー動画は、筆者が三原氏の工房を訪ね、作成したものである。動画には、ヴァイオリンの制作工程や被爆樹木の部材の活用について具体的に説明を受け、まとめている。



図2 嘉陽研究員の講話の様子



図3 被爆樹木の端材に触れている様子

【フェーズ3】

フェーズ3では、光輝(かがやき)の授業を行った。授業の中では広島大学音楽文化系コースの学生を講師として招聘し、被爆樹木を使って作られた楽器による弦楽四重奏を行った(図4)。演奏会の中では、クラシックの作品から、ポップスまで幅広く扱い、平和の祈りと題して、前述した南方特別留学生が演奏していたインドネシアの愛唱歌『Terang Boelan』も取り上げた。また、演奏会の最後には、合唱曲『Believe』を広島大学音楽文化系コースの学生が弦楽四重奏用に編曲したものを使用し、生徒は合唱で参加した。



図4 芸術鑑賞会の様子

なお、フェーズ2の嘉陽研究員の講話³⁾とフェーズ3の芸術鑑賞会⁴⁾については本校HPに記載しているので、参考にされたい。

4, 子どもたちへの効果(成果・課題)

本実践を通して、以下のような成果と課題が得られた。

【成果】

①ヴァイオリンの学習における協働的な学びにより器楽領域の学習の深まりが見られた。

発音原理が視覚的に捉えられることから、相互にアドバイスするなど協働的な学びの場面が多く見られた。ヴァイオリンの技能の習得におけるペア学習の効果について、93.2%の生徒が肯定的回答をしている。

②自分と平和との関連について考えることができた。

フェーズ2において「平和とは何か」という問いを生徒に投げかけると、「戦争がないこと」という消極的平和の側面⁵⁾しか考えられなかった生徒が「差別がないこと」という積極的平和の視点に触れることで改めて平和という言葉のもつ深さやその実現のためには多様性を尊重し、協力し合わなければならないことなど、平和の実現のために必要なことを理解し、平和の実現を自分たちの問題として捉えることができた。

③音楽のもつ力について再認識することができた。

被爆樹木を使って楽器を製作し、後生に伝えていくということやその楽器で人と人がつながるといことなどから、音楽のもつ力を再認識しているふり返りの記述があったことや、本研究において98.6%の生徒が音楽のもつ力について新しく発見したり再認識したりすることができたと回答していることから、音楽のもつ力について再認識することができたと考える。

【課題】

「平和」という言葉やそれに付随する学習活動が学習指導要領上に明確に位置づけられていないことなどから本研究を継続して実行したり汎用的に実行したりするためには効果的なカリキュラムマネジメントを行う必要があると感じた。

3) https://www.hiroshima-u.ac.jp/fu_mihara/060118/kagayaki_peace_violinR6

4) https://www.hiroshima-u.ac.jp/fu_mihara/060129/music_peace_cencertR6

5) 平和学の父と言われたノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥング氏が提唱した概念。戦争がない状態の「消極的平和」に対して貧困や差別、抑圧など構造的な暴力のない「積極的平和」という考え方を提唱している。